



はじめに・・・

こんにちは！

お恥ずかしながら、本棚をあさっていたら私が中学2年の時に書いた小説がでてきたのでせっかくだから作ってみました。【需要ないけどね】

文章は中二当時のまま載せようと思います。

はっきり言って、駄文です！

いま読み返しても、恥ずかしい・・・

しかし、新選組は私の青春！

当時は朝から晩まで、頭の中は新選組しか考えていなかった 笑
なつかしいですなあ。

いや、今だって新選組に愛をそそいでますよ！

ちなみに、未完です。続けられそうだったら、完成させたいですが。

そんなこんなもんですが、読んでいただけたなら嬉しいです。

キャラは大河ドラマ新選組！、少女マンガ「風光る」
を思い浮かべてくれればよいと思います。



2011. 1. 4

あまむ

ここは京都新選組屯所。春の日差しが暖かく屯所を包んでいた。屯所の門から、沖田と山南が出て行き、
近くの居酒屋に入って行った。実は昨日巡察の時、近頃街の人々を困らせている盗賊を捕まえたのだ。

今日は、その祝いにでもと2人で飲みに行くところ。昼間っからだが、この日はちゃんとお休みをいただいている。

「総司、昨日はお手柄だったなあ。」

「ええ、あんなに事件を起こしているのに賊が2人だったとは。」

2人は居酒屋ひょうたんという店に入った。

「大物の賊を捕らえたし、しばらくは京の都も安泰ですね。」

「でも、まだ油断はできないよ。賊は2人ではない。きっと捕らえられたことを聞いて何か手を打ってくるはずだ。」

ほどよく酔いがまわった頃、屯所へと向かった。

十字路を右に曲がると、壬生寺の前に1人の男が血を流して倒れている。

「おい、大丈夫か！！しっかりしろ！！」

山南が男をおこしてみると、まだ息がある。その時、近くの家の中庭から2人の人影が四条河原町の方へ向かって走っていくのが見えた。

「総司！私はこの人の手当てをするから、あの2人を早く追ってくれ！！」

「承知！」

人影が逃げたほうへ、総司は走り出すと向こうから5、6人ほど男たちが走ってやってくるのとすれ違った。不意にすれ違った瞬間総司には、直感で逃げた2人の仲間だと思った。

が、しかし気付いたときには遅かった。奴らの仲間は、背を向けて手当てをしている山南のほうへ、刀を抜いて一直線に向かっている。総司は刀を抜いて、斬ろうとしたが遅かった。

—危ない！！—

「山南さん後ろ！！」

とっさに叫んだが叶わず、振り向いた山南に1人の男が斬りかかった。幸い山南がよけたため、重傷は逃れたが総司の駆け寄った時には山南の肩から多量の血が流れていた。右肩をやられたため、手が上がらない、刀も握れない状態だった。

総司は必死になって6人相手に戦った。晴れた日の青い空が、赤い飛沫と共に紫色に濁っていく。15分程の激戦ののち、3人の遺体が転がっていた。残りの3人は逃げてしまった。

「山南さん！！大丈夫ですか！」

「ああ、大丈夫・・・」

そう言いながらも、顔には苦痛の色がにじみ出ている。

「ちょっと待っててください！」

総司は怪我人を近くの家に頼んで、医者を呼んでもらうようにと言いつけた。

急いで戻ってきた総司は、山南を背負って屯所へ急いで帰った。

—夕方—

山南の応急処置をした、藤堂平助は総司に会った。

藤堂は、山南と同じ北辰一刀流の同門なのである。同じ千葉周作先生のところで直々に剣術を習った、いわば藤堂の先輩なのだ。総司は重々しく言った。

「山南さんはどうですか・・・・・・。」

「今、お医者さんがみているよ。全治1カ月くらいだって。」

総司は何も答えずに去った。自分の部屋へ行き、仰向けになって天井を見つめた。

—1カ月の傷は大きい。あの時奴ら6人のことを、もっと早く気づいていれば山南さんもあんなことには—

そっと目を閉じる。頭の中で後悔の渦がぐるぐるする。

だめだ。

その後、総司は山南の部屋へ行った。

「失礼します。」

すうっと障子を開けた。医者はもう帰っていた。

「山南さん・・・ごめんなさい・・・」

山南は総司の顔を見た。いつもへらへらと人を笑わせている彼には珍しい表情だった。今にも涙が出てしまいそうではないか。

「いいんだよ。お前が助太刀してなかったら、今頃僕は死んでいたかもしれないんだ。ありがとう。」

にっこりと、柔和な表情をつくり言葉を続ける。

「気にすることはないよ。第一、謝るのは私だ。私がおっと殺気に気付いていたら、総司は土

方君に怒られなくてすむだろう？」

総司は顔を下にうつむけたまま何も答えない。

「総司、君の好きな甘いお菓子があるよ。」

山南は机から箱を出してきた。

総司は初めてにこっと笑ってお菓子を食べた。とその時突然障子が開く。

「総司、俺の部屋へ来い。」

少し怒っているような声の主は土方だった。廊下を歩きながら

「お前、山南を怪我させてしまっただろう。」

その声は、わざと優しい。

「まあ、気にするな。誰でもそういうことはある。」

どうやら、土方が総司を読んだのは、山南に関してのことではなかったらしい。副長の部屋へ行くと、近藤勇もいた。近藤もめずらしく真剣な顔つきだ。総司は、何か重大な話だということを感じた。

「総司、実は今日山南さんを襲った奴らも逃げた2人も、昨日お前たちが捕らえた2人と仲間だったんだ。」

と近藤は話す。

「どうしてそれを・・・」

思いもしないことに総司は驚いた。

「今日、あの2人を町奉行所へ送ったんだ。山南さんに関しても、知らせておいた。そして、その2人の仲間は30～40人前後の賊だと言われたんだ。」

土方は腹を立てている。

「へえ～。」

「新選組に捕獲願いを出しておいて、2人送ったら『他にもいるんだ』だぞ。そりゃねえだろ。初めっから言えっつうの。」

そしてすこぶる機嫌が悪い。

「だな。初めから言ってくればよいものを。」

近藤も腕を組みながら憤慨している。

「奴らにはどう対応します？」

「そりゃあ奴らは悪賊だ。優しくしてられっかよ。」

「なら、大丈夫ですね。」

「総司、何が言いたい？」

「いや、土方さんがそんなに怒らなくても、土方さんの鬼っぷりにあったらいくら悪賊でもひるんで卒倒してしまいますよ！

「ははははは。」

近藤もくすくす笑っている。

「うるせえ総司。お前に話した俺が間違っていた。」

障子をスコーンと開けて、ドカドカと部屋を出て行った。

「まあ気にするな。いつものことだ。」

「なんにも気にしてませんよ。」

「総司、これから新選組は一人残らず賊を捕まえるぞ。」

真面目な顔に戻る。

「賊の拠点をまずは見つけねばならんな。事は慎重に進めならんからな・・・およそ1カ月はかかるはずだ。そのころには山南さんの傷も治っているだろう。出勤は、俺たち試衛館の者と、幹部の山崎、武田、平隊士の吉村、加納、中村の14名。相手にも2, 3人腕の立つ者がいるらしい。人数の差もあるがこれだけの精鋭隊ならいけるだろう。一網打尽にする！」

「わかりました。山南さんの傷を負わせた賊にこの私の手で仇をとって見せます。」

総司は自信ありげに言って部屋を後にした。途中なんとなく山南の部屋へ寄り、

「山南さん！早く傷、治してくださいね！」

と一言おいて行った。

そのころ屯所の道場では、斎藤一と永倉新八が立ち合っていた。審判は藤堂。凄まじい竹刀の音を立てているこの道場は、今は3人しかいない。

総司は近藤に「お前は、試衛館の者にさっきのことを伝えてくれ。」と頼まれたのだ。

道場の戸を開けた瞬間、永倉が総司に倒れこんできた。

「斎藤さん面一本！！そこまで！」

藤堂の甲高い声が道場に響き渡る。

「痛てて……さすが斎藤さん強いなあ。」

「それほどにも……」

総司は、

「源さんと、原田さんは？」

「今日はそれぞれどこかお出かけらしいよ。2人とも今日は夜勤だから夜には戻るって言ったなあ。」

「そういえば山南さんの状態は？」

永倉と斎藤が心配そうに尋ねる。

「1カ月くらいで治るみたいだよ。」

総司は近藤や土方に先ほど言われたことを一つ残らず話した。

—まったく、源さんと原田さん、こういう時に限っていないなんて……—

「それより、沖田さん。お疲れでしょ。一本勝負、どうですか！」

「はあ……。」

藤堂に勧められるまま、竹刀を持たされ防具をつけた。

相手は斎藤。沖田、永倉、斎藤と言えは隊内でも屈指の剣豪である。

審判はまた藤堂。

総司は天然理心流最強の下段に構える平正眼の構え。斎藤は得意の左突きの構えをとった。息をつくとまず、斎藤の方から出てきた。そのまま、一直線に左突きをしかけてくる。それを総司は素早くかわし、胴を斬ろうとしたが、斎藤の防ぎに破られる。2人は2、3歩下がり、形を取り直した。

素早い動きと竹刀の音が道場の中央で繰り返される。2人とも一寸の隙間もない。総司は斎藤に向けて面を打った。その時、気を許したのだろうか、斎藤がほぼ同時と同じくらいに後ろから胴を大きく打った。

「斎藤さん一本！！そこまで！」

斎藤が防具を取りながら

「今のは沖田さんが先だったぞ。」

というと、藤堂が言う。

「竹刀の勝負だから、沖田さんのを1本にするにゃあ、剣が浅すぎた。」

「でも、これが本当の刀の真剣勝負だったら、斎藤さんは総司の面1本でやられていたな。」と見ていた永倉も添えた。それに対して総司は

「それは、ありませんね。こんなに怖い勝負だったら、私はとっくに逃げていますからね！」
道場にどっと笑いが響き渡った。

夜、子の刻になると原田と井上が帰って来た。総司は事情をすべて説明した。

そろそろ寝ようかと、布団へ入った時土方が入ってきた。

「まだ起きていたのか。」

「ええ、でももう寝ますよ。」

「話を聞け。山崎が今、奴らのたまり場を偶然見つけてきた。1つはお前が行った『ひょうたん』という店と、『喜助屋』という場所だ。もちろん、目星だからな。明日から張り込みをする。『ひょうたん』を張り込むのは、お前と山崎、斎藤、平助、俺、だ。この中にはいずれ山南さんも入ってもらう。『喜助屋』の方は、残りの隊士だ。俺は大方『ひょうたん』がくさいと思っているが、な。まあ、詳しいことは明日山崎から聴いてくれ。」

要件を言い終わると、土方は静かにおやすみと言って出て行った。

「土方さんおやすみなさい。」

—翌日—

屯所の門の前で、沖田、山崎、土方、斎藤、藤堂は山崎を囲み、詳細を聞いていた。

「賊は30～40人とみています。でも、全員が集まっているとは限りません。不審な人物や、沖田先生が見かけた人物がおったら、この呼子をならしてください。」

と言って、山崎はみんなに呼子を渡す。

総司は、ほっかむりをして町人になり済ましている山崎に感心していた。さすが監察方。京都訛りも板についている説明を受けながらそんなことを考えていた。手渡された呼子を試しに鳴らしてみると、甲高くよく響いた。

「この笛の音がしたら、音がした所へ集まってくださいね。万が一重傷者が出た時も、これを鳴らしてください。では、いきまひよか。」

「山南さんは？」

とっさに藤堂が言った。

「山南さんはもう少し、安静にしていってもらいました。」

その後5人は屯所を出て、東へ歩き、銭取り橋の方へ向かった。鴨川を渡ってすぐのところに、「ひょうたん」という旅籠がある。土方を先頭に入ろうとした時、

「ちょっと待て。」

止めたのは斎藤だった。

「このままの姿で店に入れば、すぐに新選組だということがわかってしまう。今日のところは、この羽織を脱いで入る方が賢明ではないだろうか。」

「・・・確かに、斎藤の言うとおりのだ。よし、皆隊服を脱げ！」

普段は素直でない土方も、試衛館の者には割と素直である。

「主人はいるか？」

店に入ると、静かにひっそりとしている。草履は3つほどしかない。「へ、へえ」とあわてた様子で出てきた主人に

「我々、昨日友と会ったのだがその友が、忘れ物をしましてな。確か、この辺の旅籠に泊っていると聞いたので、訪ねてきたのです。友がそちらに泊っているのか知りたいので、宿帳を見せてもらえますかな。」

以外にもここにいる鬼副長は鬼ではなかった。常連客も見ると、土方の雄弁にこじつけた理由で半年前からの宿帳も見せてもらった。そこには、5人の名前がいたるところにある。半年前には3カ月に1度の宿泊が、現在に近くなるほどここに来る回数が増えてきている。しかし、ただ一人例外があった。「西之谷玉兵衛」という名だ。この人物は定期的に宿泊している。